

令和6年度 調布市立若葉小学校 学校評価報告書（学校長 内藤 みゆき）

学校の教育目標
○かしこく（しっかり考え、進んで学ぶ子） ○やさしく（思いやりのある子） ◎たくましく（明るくたくましい子）
目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像、教員像、児童・生徒像
笑顔あふれる「たい※」が泳ぐ学校 ※「～したい」「やってみよう」等といった前向きな思いやエネルギー 分かれ合おうとする心と考える力を言葉と向き合いながら身に付ける子ども

調布市立学校における共通した領域 ＜短期的な経営目標＞						
	1 豊かな心(徳)		2 確かな学力(知)		3 健やかな体(体)	
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	① 年3回の児童アンケートや月1回の校内委員会、週1回の生活指導夕会での情報共有を個に応じた支援や組織的対応につなげ、児童の安心感や自己肯定感を向上させる。	A	① 主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善に取り組む。殊に児童の学習意欲を喚起し、考えることや意見交流することの楽しさを味わわせる授業づくりに努める。	C	① 体力向上を図る取組（体育朝会や第四中校庭を借用した休み時間の運動の場確保等）を工夫し、運動の楽しさを味わわせる。	B
	② 規律の定着を図り、安心できる生活環境を整える。また、道徳科の授業を中心に心の教育を充実させ「いじめはどんな理由があってもいけない」という意識の向上を図る。	B	② モバイル端末の効果的活用を推進し、教員の指導力と児童の情報活用能力を同時に向上させる。（指導計画の確実な実施・ICT朝会による情報モラル教育の充実）	B	② 学校全体で交換授業や交換HR等を推進し、学年全体で学年の児童を見ていく意識を高め、多面的な児童理解や児童が相談しやすい環境づくりにつなげていく。	A
	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価
	① 学校評価アンケート（児童）において、関連する項目への肯定的回答 目標：90%以上 「学校が楽しい」 結果：89% 「自他の尊重」 結果：92%	B	① 児童アンケートにおいて、関連する項目の肯定的回答 目標：昨年度比 +3Pt 以上 結果：（4～6年アンケートの平均値） 「授業理解」 →昨年度比 -4.6Pt 「主体的取組」 →昨年度比 -8Pt	C	① 学校評価アンケート（児童・保護者）において関連する項目への肯定的回答 目標：80%以上 結果：「健やかな体作り」 児童：77% 保護者：85%	B
学校関係者評価	②(1)学校評価アンケート（児童・保護者）の関連する項目への肯定的回答 目標：90%以上 結果：「基本的生活習慣」 児童：86% 保護者：86% (2)学習状況調査（児童）の「いじめ意識」項目の肯定的回答 目標：昨年度比+3Pt 以上 結果：「いじめはどんな理由があってもいけない」 →昨年度比+3.8Pt（94%→97.8%）	B	② 学校評価アンケート（児童）において、関連する項目の肯定的回答 目標：90%以上 「基礎的な学力」 結果：86% 「ICT 機器の活用」 結果：87% 「ICT 機器のルール」 結果：86%	B	② 学習状況調査（児童）「困りごとや不安がある時の相談」項目の肯定的回答 目標：昨年度比+3Pt 以上 結果：昨年度比+1.3Pt （56.7%→58%）	B
	自分のことはできていても、周りの子のことを思いやってあげられない子も増えていると感じる。内面の温かさが育つよう、学校・家庭・地域が一層連携して育てていくことが大切。		本校に限らないが、病休や産育休等に対応できる人材が見つからない等、教員が欠員状況になり得る現状は大変嘆かわしい。デジタル機器を効果的に利活用できるような通信環境の改善は必須		運動スペースの確保のために、中学校と連携するなど工夫しているのが大変良い。工事が始まる今後が更に課題。学年全体で学年の全児童を見ていくという体制は良い。	
学校の特色を生かした領域 ＜短期的な経営目標＞						
	4 言語能力・情報活用能力の向上		5 特別支援教育の推進		6 地域との連携	
自己評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価	(1) 具体的な取組	評価
	① 「聞く」指導の徹底を図るとともに、考えを「もつ」「表す」「伝え合う」「深める」授業実践を積み重ね、考えを言語化したり、必要な情報を集め判断したりする活動を通して言語能力・情報活用能力の向上を図る。	B	① 特別支援教育コーディネーターの役割を明確にし、迅速な情報共有につなげる。月1回の校内委員会をSC や校内通級教室指導教員の参加が可能な日時に設定し、支援体制の充実を図る。	A	① 「地域学校協働本部」のコーディネイト力を活かし、ゲストティーチャー等、外部人材の活用による体験的学習の充実を図る。また、低学年児童を対象とした「放課後教室」や「漢字検定」の円滑な実施に協力する。	B
	② 読書旬間及び読書月間を中心に読書活動を推進するとともに、日常的な言葉遣いの指導を通して、言語感覚を養い、豊かな言葉の獲得を目指す。	B	② 特別支援教室での指導が在籍学級での指導・支援に活かされるよう、専門員や特別支援教育コーディネーターを窓口として円滑な連携を図る。	B	② PTA や地域学校協働本部コーディネーターとの連携を図り、春の体育的行事や秋の学芸的行事の充実につなげる。	B
	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価	(2) 成果（数値目標に対して）	評価
	① 学校評価アンケート（児童・保護者）の関連項目への肯定的な回答 目標：80%以上 「言語活動」	B	① 学校評価アンケート（児童・保護者）の関連項目への肯定的回答 目標：75%以上 「相談体制」	B	① 学校評価アンケート（児童・保護者）に関連項目への肯定的回答 目標：80%以上	A

	結果：児童 85％ 保護者 67％ ※保護者回答「わからない」が 11％ 「ICT 機器の活用」 結果：児童 87％ 保護者 81％		結果：児童 72％ 保護者 76％ ※「わからない」回答 児童 9％ 保護者 16％		「地域学校協働本部」 結果：児童 84％ 保護者 80％ 「体験的な学習活動」 結果：児童 86％ 保護者 73％ ※保護者回答「わからない」が 13％	
	② 学校評価アンケート（児童・保護者） 「読書活動」項目への肯定的な回答 目標：80％以上 結果：児童 77％ 保護者 84％	B	② 「個別指導計画」「個別の教育支援計画」の作成 目標：100％ 結果：100％ 目標：巡回指導教員と学級担任との連携の場の設定。 結果：校内委員会を巡回指導教員が参加可能な曜日に設定したことで、迅速な情報共有や支援体制の検討につなげることができた。	B	② 協働本部コーディネーターと管理職との打ち合わせを月 1 回実施し、翌月の取り組みや予算執行状況の確認等を行い、円滑な活動につながった。 PTA のお手伝い協力をお願いした行事については、事前に管理職や行事委員長等との打ち合わせを実施し、円滑な運営につながった。	B
学校関係者評価	1 学期と 3 学期の授業観察を比較し、子供たちが落ち着いて学習に向かい、話を聞くことができるようになり、成長してきていることが分かる。デジタル機器に費やす時間が増えていることが、子供たちを読書から遠ざける一因になっていると感じる。		校内委員会の構成メンバーの充実等、学校が組織的に子供たちを支えようとしていることが分かる。ただ、そうした取組や相談方法等が、保護者にあまり知られていない。広く周知していく工夫が求められていると感じる。		漢字検定や放課後教室、ゲストティーチャー招聘授業など、地域学校協働本部が主催したり調整役となったりする活動が充実していて良い。ただ、まだ知られていない面があるのがもったいない。もっと活動の様子を外部に発信していくと良い。	

人材育成・組織運営	
自己評価	- 今年度は年度途中の教員欠員に対応して、高学年算数少人数指導担当の教員を学級担任に置く状態となったが、その穴を埋めるべく各教員がプラスαの役割を担って支えてくれた。若手教員が多い学校だが、ベテラン教員を中心に各学年団・専科団の中だけでなく、皆で学び合おうとする風土が醸成されていることを感じる。 - 児童数 900 名を超える中でも個々のニーズに応じた支援を充実させるため、特別支援教育コーディネーターの役割は一層大切になってきている。情報共有や関係諸機関との連携が円滑に進むよう、5 名のコーディネーターが役割分担をしながら奮闘し、情報共有が進んできている。しかし、通級学級巡回指導教員との連携のための時間確保に依然として課題が残った。 - 校内研究は、昨年度までの研究を生かす形で、体育科を通した授業改善に取り組んだ。研究主任が今年度の東京都小学校体育科研究員となったため、そこで学んできたことを還元する形で各分科会の話し合いに参加する等、OJT が自然な形で実現される場面が多々あった。また、各分科会（殊に授業者の学年団）が授業者を支える形で先行授業や事前授業に取り組み、授業者を孤立させることなく充実した研修機会となっていた。 - 教員間で、自身の得意分野を生かし、他教員に助言する光景が日常化している。相談し合い、助け合う雰囲気醸成されていることが、教員のメンタルヘルスにも良い影響を与えているものと考える。今後も職層に応じた職責の自覚を促しつつ、より充実した教育活動が実施できるように努めたい。
学校関係者評価	- 行事等での様子から、児童と教員の信頼関係の一端が垣間見れたり、教職員が懸命に子供たちを支えようと動いたりしていることが伝わってくる。良いチームワークが構築されていると感じる。 - 特別な支援を必要とする児童が増えている中で、様々な連携や支援を模索して対応していることが分かった。個人情報保護の観点から、広く詳細を伝えることができないことは理解できるが、悩んだ時や困った時にどこに連絡すればよいのか等を、もっとわかりやすく広報していくと良いのではないかなと思う。
中期的な経営目標の達成状況	
① 自己指導能力を高め、自他の命を大切にし、自律した言動がとれる児童を育成する。 ⇒児童アンケートで「基本的な生活習慣」「適切な言葉遣い」項目の肯定的回答は共に 86％と 9 割に今一步の段階である。気持ちを切り替えたり苦手なことに向き合ったりすることに困り感を抱えている児童が増加している現状も踏まえ、家庭との連携や関係する教職員等との協働体制を更に強化し、児童の自他の命を尊重する心情の涵養や自己指導能力向上のための指導を充実させていく必要がある。 ② 自己肯定感を高めつつ、基礎基本をしっかりと定着させるとともに、主体的で対話的な学びを通して考えを深めていく児童を育成する。 ⇒令和 6 年度全国学力調査における平均正答率はいずれも都や全国平均を上回っており、学力の定着が図られているものと捉えられる。しかし、児童アンケートで「基礎的な学力」項目の肯定的回答は 86％に留まる。自身の学びを自覚させ、自己肯定感を高めていく必要がある。 ③ 健康保持・体力増進への意識を高め、自ら考え判断し、粘り強く実践する児童を育成する。 ⇒プレハブ校舎等による校庭狭小化の中、これまで昼休みやクラブ活動、行事等で借用していた第四中学校校庭も、いよいよ令和 7 年 7 月からは校舎建設工事が始まるため使用できなくなる。縄跳び月間の取組等の工夫はしているものの、運動場所の確保自体が一層困難になっており、大変頭が痛い状況である。市教委との相談連携を強化するとともに、なお一層の工夫が求められている。 ④ 全ての基盤となる言語能力と情報活用能力の向上を目指し、言語環境を整えるとともにモバイル端末の効果的活用を推進する。 ⇒各教員が学習活動の中で意見交流の場を意図的に入れたり、国語辞典を日常的に活用させたりして、言語能力の向上に努めている。しかし、読書活動の二極化は解消されておらず、言語表現を苦手とする児童も少なくない。一層の工夫と授業改善が必要である。また、学校全体として ICT 機器の効果的活用を模索し、ミニ研修を重ねたり、学年全体で取り組みを共有したりして情報活用能力の向上に努めている。引き続き市教委とも連携し、通信環境が著しく悪い本校の通信環境改善の要望を継続し、さらなる活用が進むように努めていく必要がある。 ⑤ 特別支援教育を推進し、SS や SC、SSW、巡回指導教員等を含めた全教職員及び関係諸機関との組織的連携を強化していく。 ⇒校内委員会メンバーの充実や関係諸団体との連携等、改善を図ってきているが、学校評価アンケートの結果を見ると「分からない」という回答が多く、保護者への周知活動が必要である。 ⑥ 保護者・地域との連携を密にし、教育活動の充実と安全確保を図るとともに、CS へ向けた理解促進を図っていく。 ⇒CS へ向けて一層の理解促進を図っていくことが必要である。 人・組 職層に応じた自身の役割を自覚し、学校経営方針を実現させるための取組を意識し、工夫しながら動くことのできる組織を構築する。 ⇒学年団による OJT、学校全体としての OJT を両輪で進めつつ、教職員が同じ方向性をもって教育活動を進めていくことができるよう、引き続き、職層に応じた役割に対する当事者意識を涵養していく。	
次年度の重点課題	
- 工事着工を控え、運動できるスペースが更に狭められる環境下における、運動場所や機会の確保 - 情報モラルを定着させつつ、情報活用能力を向上させていくための環境整備や取組 - 多様性を真に理解し、互いを尊重し合う人権教育の取組 - 学ぶことへの主体性の醸成	